

### ■パンドラの箱は閉じられた

待ちに待った5月20日、R紙夕刊の紙面を隔から開いて探したが「パンドラの箱を開ける時」は、何処にも掲載されていなかった。通常、何らかの理由で連載記事が予定日に掲載されない場合、執筆者が掲載紙の方から、休載の理由について、この予期せぬ休載については、上原氏はおろかR紙側からも一切の説明もなかった。突然の休載に愛読者として、一抹の不安が胸をよぎった。言論封殺ではないかという不安だ。漫画家の小林よしの氏が、沖繩の新聞のことを「異論を許さぬ全体主義」だと皮肉ついていたことが現実のものとなって目の前に現れた、と考えた。R紙に電話を入れて掲載中止の理由を問いただした。だが、最初に対応したR紙の記者は、連載記事が掲載中止になっている事実さえ知らない様子だった。「自分の新聞のことも見ていないのか」と、言われて連載特集が掲載されていないことを確認した後、電話は編集部に回されたが、その時「上原さん、原稿が間に合わなかったのかな」という記者の独り言が聞こえた。上原氏の記事の突然の中止は記者にも知らされずに急遽「言論封殺」が行われたものと直感した。その後電話に出た編集部の担当記者も動揺を隠さない様子で「調整中です」を連発するばかりで、納得できる応答は出来なかった。その時のやりとりを、当時から書いていた政治ブログ「狼魔人日記」に「沖繩のマスコミは大政翼賛会か」というタイトルで書き、読者の支持を受けた。翌日のブログには「R紙は報道機関としてのプライドをかなり捨て、連載中の記事を『削除』するという禁じ手を使ったことになる。自分の意見と異なるという非常に分かりやすい理由で」と書き、「沖繩の言論空間はいよいよ異様な様相を呈してきたようだ。サヨクの方が常用する『戦前のような言論弾圧』がメディア主導で今正に沖繩で行われている」と続けた。このR紙による唐突ともいえる「休載」に対し、私のブログ「狼魔人日記」の読者の反響は、大きなものだった。「R紙に抗議します」というタイトルで「R紙の言論封殺が今日で4日目です」「今日で7日目です」と定期的にエントリーして抗議の意を表した。

### ■画龍点睛を欠く連載の再開

それから四カ月が経過した10月16日「パンドラの箱を開ける時」が突然再開された。10月19日付のブログで書いたことを引用す

### 「10月16日。二回目の」教科書検定意見撤回要請団

が東京し、沖繩中を巻き込んだ「集団自決」に関する大フィーバーも一段落が着いた。地元紙の紙面にも一時のような「新証言者登場」といった刺激的な記事も始まらなくなった。その静寂の合間をつくように、その日(16日)のR紙夕刊に、4カ月の長期にわたって中止されていた「沖繩戦の記録」がソッと再開された。まるで「目をほはかるように」。何の予告もなく、(略) R紙側の突然の連載中止であるにも関わらず、新聞社側からは連載中止の知らせも、4カ月後の突然の再開の知らせも読者に対しては一言の説明もなかった。今後、R紙は「説明責任」で他人を責めることは出来ない。結局、4カ月前に電話で問い合わせた答えの通りの長い「調整中」を、筆者の上原さんの「長い夏休み」としてゴリ押ししたのだろう。げに恐ろしきは新聞社の「調整」を別の名で言ったり「言論封殺」と呼ぶ。長い「調整」の結果、内容も「調整」されている模様。

## ドキュメンタリー作家上原正稔の挑戦!

### ～R紙の言論封殺との戦い～ (下) 江崎 孝

をしたか」と変更されているではないか。「集団自決」が起きた1945年3月下旬の慶良間を飛び越えて、4月以降の沖繩本島の米軍上陸、投降住民の管理の模様を記しており、「慶良間」で何が起こったかについては触れていない。(「狼魔人日記」2007年10月19日)

不自然な休載と同じく、不自然な連載再開だった。R紙が上原氏に対して言論封殺を行ったという疑念は確信に変わった。私が一読者として感じたことはR紙の読者の誰かが感じたことだと考えた。R紙が言論封殺した上原氏の記事「慶良間で何が起きたか」は一体、R紙を動揺させるどんな内容が書かれていたのか。だが、地元を代表する新聞が「集団自決」に関する連載記事を突然中止したことに對しては当然、いろんな憶測が飛び交った。「新聞を中心に展開されている教科書検定運動に水をかけることになり、内容にためめ」だとか、「編集担当者の態度に変化があり、今回の事態になった」とも言われた。

### ■R紙の言論封殺

上原氏の連載が中止された日の朝刊、文化面のトップに林博史関東学院大学教授の「沖繩戦」特集の第一回目が掲載されていた。林が教授といえば日本軍は残酷非道だと糾弾するサヨク学者で、「集団自決訴訟」でも被告側の証拠を収集したことで知られている。私は当時の沖繩メディアの異様な有り様を同時進行でブログに書き続けた。

それが偶然雑誌社の目に留まり「沖繩紙の言論封殺」について原稿を依頼され、月刊誌「WILL」に「これが沖繩の言論封殺だ」というタイトルで掲載された。本文と重複する部分も有るが、有力言論誌が沖繩メディアの異常性を告発したという意味で注目されるので関連部分を抜粋引用する。

### ■月刊誌「WILL」がR紙の告発記事掲載

「集団自決」というテーマは地元紙を中心に沖繩メディアが「民意」を煽っている最もホットなテーマははずだ。言うまでもなく慶良間とは「集団自決」に関する「軍命令の有無」が問題になっている座間味島と渡嘉敷島を含む、慶良間諸島のことを指す。

だが、その特集記事は、読者に何の断りもなく、突然、中止になった。執筆者あるいは新聞社側の「お知りませ」や「弁明」等は一行も掲載されていなかった。

それが偶然雑誌社の目に留まり「沖繩紙の言論封殺」について原稿を依頼され、月刊誌「WILL」に「これが沖繩の言論封殺だ」というタイトルで掲載された。本文と重複する部分も有るが、有力言論誌が沖繩メディアの異常性を告発したという意味で注目されるので関連部分を抜粋引用する。

### ■竜頭蛇尾の最終回

上原氏の「長い夏休み」が終わり休載中の記事が再開されたとき、私はR紙の言論封殺を直感的に感じながらも、執筆者の上原氏に對して一種の失望感を感じたことを記憶している。

「第13話 最終章としてひと言で言えば「上原正稔よ、お前もか!」という心境だった。

その年2007年は新聞に登場する識者と言われる人達の「集団自決」についての論評は一斉に横並びで、例外なく「軍命があった」の大喝だった。すく

なくとも私の知る限り、「軍命」を否定する識者の論文は見つからなかった。その期連載戦記「パンドラの箱を開ける時」は、皮肉にも閉じたまま最終回を迎えることになったのだ。

「慶良間で何が起きたか」の記述を欠落したまま終わるのでは、期待して最後まで読み続けた読者を裏切ったことになる。読者はR紙によって「知る権利」を奪われたことになるのだ。

その後、上原氏がR紙の言論封殺に對し提訴することを知った一読者としての偽らざる心境は、上原氏がR紙を相手取って起こした「パンドラの箱掲載拒否訴訟」は、上原とR紙の間の損害賠償の訴訟ではなく、R紙が自己のイデオロギーのため読者の「知る権利」を封殺したということになる。

つまりこの訴訟は、実質的にはR紙が全読者を敵に回した「言論封殺」訴訟ということができる。(亘野 湾市、evak022@nifty.com)

### ■読者を敵に回したR紙

「お詫」22日付けの本寄稿(④)で見出しと寄稿者名が誤っていました。また、第5回口頭弁論は、1月24日の誤りでした。お詫ひして訂正致します。